犯罪墓地

結城昌治

東都書房

犯罪墓地　　定価300円

昭和37年11月25日　第1刷発行
著者　結城昌治
© Shōji Yūki 1962
発行者　西村俊成
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
発行所　東都書房
東京都文京区音羽町3丁目19番地
電話(東京)(941)3111　振替(東京)72732
落丁本乱丁本はおとりかえします

目次

餌　食　5

もつれ　62

虹の中の女　97

失　踪　135

通り魔　195

装幀　北代省三

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

餌食（えじき）

その日、久一郎は朝から様子がおかしかった。足袋のコハゼをとめようとした右手の指が、思うように動かなかったのである。足袋をはき終ったときは、かなり苛立っていた。

しかし妻の美矢子が、いつもとはちがう久一郎の様子に気づいたのは、朝食の箸を二度までも取落すさまを見たときだった。初めは考えごとをしていて不注意に落したのかと思ったが、二度目にははっきりそうでないことが分った。昆布の佃煮をとろうとして伸ばした手の指の間から、わざと指の力を抜いたかのようにポロリと落したのである。

傍らで給仕をしていた女中は脇を見ていて気づかなかったらしく、美矢子も気づかぬふりをして食事をすすめた。重なる不覚を、久一郎自身がどう受取ったかは分らない。落ちた箸を拾うと、やはり黙々として食事をすすめた。

「久生からは何とも言ってこないか」

久一郎は食後の番茶を飲み干して言った。別居して三年にもなる一人息子を、彼が話題にす

ることは珍しかった。
「いえ」美矢子は急須に薬罐の湯を注ぎたした。「たまには遊びにいらっしゃればいいのに――」
バカな奴だ」
久一郎は吐きだすように呟いた。そして、
「お前がこの家にきてから、来月でちょうど四年になるな」
ふいに話を変えた。
「そんなになるかしら」
「久生が大学を卒業する前の年だった」
「早いものですわね」
「早いと思うか」
「ほんとに早いですわ。あっという間ですもの」
「そうか――」
久一郎はまた黙ってしまった。
ずんぐりと肥満した体軀、猪のように太く短い首、その首に支えられている二重顎の赤ら顔、ぶよぶよして、押せば粘液のにじんできそうな、夏ミカンのようにブツブツのある肌、腫れぼったい眼の下で、閉じているのか開いているのか分らぬ細い眼――。
ふいに妙なことを言いだし、ふいにまた黙りこんでしまった久一郎の意中を、美矢子は忖度

しかねて不安だった。そしてこの不安には、つい最前、箸を取落した久一郎をみて抱いたひそかな期待を、見透かされたのではないかという危惧が加わっていた。

柱時計の針が、八時十五分を指した。

久一郎は老人くさい咳払いをして立上った。八時半までの十五分間で出勤の身仕度をするのである。そうすれば、八時半を一分と違えずに秘書兼運転手の永津元彦が迎えにくる。ラジオの番組表のように日課の決まっている久一郎は、定刻を五分遅れても、あるいは五分早すぎても機嫌が悪くなるのだ。そのために、永津は定められた時間の二十分前には近所の空地まで乗用車を乗りつけておき、そしてしばらく待機したのち、八時半寸前に久一郎宅玄関前に滑りこむことができるよう、交通難の時間をはかって会社を出発するのである。

だからこの朝も、

「おはようございます」

玄関に永津の声が聞えたのはちょうど八時三十分、久一郎が背広を着終ったところだった。靴をはき、女中に靴紐を結ばせ、玄関を出るまでは何事もなかった。

「行ってらっしゃいませ」

美矢子は女中と一しょに頭をさげた。

久一郎は振り返りもせず、エンジンをふかし放しで待っている車へ向かった。彼の体が大きく揺れて横ざまに倒れたのは、永津の開いたドアから乗ろうとして小腰をかがめたときだった。倒れた久一郎は、閉じた唇の両端から白い灰汁のような泡を吹いた。息遣いが荒く、顔が

真赤だった。
「お医者さんに電話を――」
美矢子は、永津に抱き起された久一郎をみて、女中のスズに言った。
スズは慌てて門の外へ跳出そうとしたが、すぐに気がついて家の中へ駆けこんでいった。
「脳溢血ですね」
永津が美矢子を見上げて言った。
「朝起きたときから、様子が変だったわ」
美矢子は乱れずに答えた。

小峰久一郎――五十六歳、日本橋に三階建のビルを構えた小峰不動産の社長である。終戦後、地価の値上りを見越して、私鉄沿線の土地を買いあさっていたのが思惑どおりに当って、もとは場末の一ぱい飲屋のおやじに過ぎなかったのだが、今や不動産業界で彼の名を知らぬ者がない。札びらを切って押しまくる強引なやり口が非難されぬでもなかったが、ひとたび時流にのってしまえば、面白いほど儲かる時期がつづいたのだ。土地建物の売買から金融業にまで事業をのばして、常時動かしている金が一億とも二億とも言われている。先妻は十年ほど前に病没して、美矢子は後妻である。二十一も年下の妻だ。社員の妻だった女を強引に奪い取って再婚したのだ、すべては金の力だったということを久一郎は知っている。しかし金以外の力をもたぬとすれば、彼は金の力で押通すほかはなかった。年甲斐もない恋をしたのである。理非

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

分別をわきまえながら、だからといってどうにもならぬ恋をしたのだ。
当時大学生だった久生は、そんな父の心を知って憐んだ。再婚には反対したが、もともと子供の意見をいれるような久一郎ではなかったし、久生も「――財産を分けられるのが惜しいのか」などと言われては、強いて言葉を返す気にならなかった。父には父の人生があり、俺には俺の人生がある――彼はそう割切って口を噤んだ。とうに以前から、情のつながらぬ父を他人の眼で見る習慣を養っていたのである。そして大学の卒業を待っていたように、家を出てしまった。むろん父の仕事を継ぐ意思はなく、自分勝手に仕事を選び、いつ潰れるか分らぬような三流出版社に勤めている。姉と弟のようにしか年の違わぬ義母の美矢子を嫌いぬいているし、父の久一郎とも滅多に会わない。
小峰家は、腰の曲がりかけた女中スズとの三人暮らしだった。

1

久一郎が倒れてから三日終った。
「どんな様子？」
永津元彦が病人の部屋から戻ってくると、疲れた体を応接間のソファにもたれた美矢子は、待ちかねていたように訊いた。看病疲れで、毎日往診にくる医者を病間へ案内する気力もなく、三日前から泊りこみで看病を手伝っている永津に案内を任せたのだ。

「どうもね……」
永津は首を傾けるように振り、美矢子の向かいに長身の腰を落した。彼も大分疲れているようだった。
「お医者さんは何と言ってるの？」
「助かるかもしれない」
「助かるって？」
「今日明日あたりが峠で、それを無事に越せば意識を回復する見込みもでてくるといってます。しかし、明後日になっても依然昏睡状態がつづけば、危ないという話だった。相変らず熱は高く、脈も早くなったり遅くなったりだが、嘔気はおさまったようですよ」
「でも、意識はずっと不明なんでしょ？」
「ええ」
「わたくしの叔母のときは、四日間睡りつづけてそのまま死んだわ」
「そう上手くいくとは限りませんからね。社長の場合は心臓が強いんです。だから、持直すだろうと医者は言ってます」
「どうしたらいいのかしら」
「どうしようもないでしょう」
「冷たいのね」
「神様に祈りますか。そうすれば天国へつれて行ってくれるかもしれない」

「冗談を言ってる場合じゃないわ」

美矢子は唇を噛みしめた。顔色が青いのは、不眠がつづいたせいよりも、緊張のためのようだった。

もし――これで久一郎が命をとりとめたら……。

美矢子はそう考えると暗くなった。そうなったら、半身不随の中気で、いつまで生き続けられるか分ったものではあるまい。久一郎が倒れ、いよいよ解放されると思ったときの、体が宙に浮いてしまいそうな喜びも束の間である。美矢子が、病弱で甲斐性のない夫を捨てて久一郎のもとへ走ったのは、徹頭徹尾金のためだった。それに久一郎の求愛の烈しさが手伝ったことも事実にちがいないが、美矢子は愛されたというだけで有頂天になる小娘ではなかったし、かりに久一郎に金がなかったとしたら、殆ど眼をくれなかったろうことも事実だった。彼女は前夫との結婚生活に倦いていた。妻に捨てられるように生まれついた男がいるとしたら、夫こそ、そんな男に相応しかった。彼女は平然と久一郎へ乗り替えたのだ。

しかし彼女の決心が、異常に高い久一郎の血圧を知ったときに決まったことを知る者はないはずだった。彼女は久一郎の余生に、人生を賭けたのである。看護婦をしていたことのある彼女は、久一郎の健康状態を聞き、その顔色をみて、そう長い命ではあるまいと考えたのだ。むろん、そんな下心を久一郎に知られてはならないから、彼の死を早めるような積極策はとらなかった。飲酒を慎しみ肉食を避けるというような医者の忠告には、久一郎に協力する姿勢をとっていたし、強いて過激な運動に誘いこむような行為も控えるくらいだった。せめてもの手段

としては、医者からすすめられた血圧降下剤を、外見のそっくりなビタミンの錠剤にすりかえていた程度である。久一郎の愛玩物として、ただひたすらに貞淑な妻を装っていたのだ。

「お医者さんは帰ったの？」

しばらく考えこんでいた美矢子は、ふいに顔をあげると声をひそめて言った。

「帰りました」

「看護婦はいるのね」

「います」

「久生さんは？」

「明日また出直してくると言って、ついさっき帰りました。意識のない病人の枕元にいつまでいても意味がないというんです。やはり疲れたのでしょう」

「スズも病間にいるのね」

「ええ、ぼんやり坐っているだけですが」

「看護婦を帰らせちまうわけにいかないかしら」

「どうしてです？」

永津はギクッとするものを感じて美矢子を見た。

「わからない？」

美矢子は反問した。まっすぐな視線が、永津の心を探るように見詰めている。

「しかし――」

永津は口ごもった。美矢子の意中が読めたのである。
「このまま二三日したら、久一郎は持直すかもしれないわ」
「でも、明日あたり死ぬかもしれないでしょう」
「どうせ死ぬなら同じじゃないかしら。死ぬかも知れないことより、持直すかもしれないことを考えなくては駄目よ。持直してしまってから何かやったら、警察に疑われるわ。今ならば、脳溢血で死んだと思うにきまってる」
「方法は？」
「いろいろあるわ」
「うむ」
永津は唸った。美矢子の考えたことは、自分から言いだせぬまでで永津も考えぬことではなかった。このまま久一郎が死んでしまえば、ざっと計算しただけでも遺産は三億円を下らないだろう。直系卑属である久生の相続分が三分の二で二億円、そして配偶者の美矢子は、残りの三分の一で一億円だ。もはや美矢子は単なる愛人ではなく、一億円つきの愛人ということになる。
「結婚すると約束してくれますか」
永津はようやく真剣になった。
「あらたまって何を言ってるのよ。その気がなければ、こんな相談をあなたにしないわ」
はっきりした返事だった。

「うむ」
永津はまた唸った。月々の小遣銭にさえ窮することのある彼にとって、一億円といえば殆ど現実感がわかぬくらいの財産である。永津は金のことを考えただけで、頭がくらくらする思いだった。小峰不動産は一応株式会社の形態をとっているが、内実は久一郎が株を一手に握った個人商店のようなもので、彼の死後、永津が美矢子と結婚すれば、当然永津が社長ということになろう。一人息子の久生は父の事業を継ぐ意思がないのだ。しかし、いかに瀕死の病人相手とはいえ、自分に人殺しができるだろうか。永津は自分の勇気を訊ねてみた。ここで問題は道義ではなかった。
「迷ってるの？」
美矢子は促した。
「いや」永津は慌てて首を振った。「方法を考えてるんです」
迷いを否定したことで、永津は迷う余地のない場所へ追い込まれたことを知った。いかなる者の生涯にも、一度だけは幸運が訪れるものだというが、この一度だけの幸運が今やってきたのだとしたら、この幸運を逃がして、いつまた幸運がめぐってくるか分らない。幸運とは、手を伸ばしてつかまなければ逃げていってしまうのだ。
「強心剤を買ってきてもらえないかしら」
美矢子はつづけた。
「強心剤？」

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton